關西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話（35）2271
発行編集人　村井弘二
（一部10円）

古本全般売買
天牛本店
道頓堀中座前
電話（211）二七五八・九番

千里山移転　現実は勤労学生のしめつけ

「教育の充実」のもと—合理化—

大学当局は強弁な姿勢

二部の千里山移転が社会学部の移転の動向を契機としてより現実性を帯びるもとで、新報は勤労学生の否定といった学校当局の動向、それに対する学生の反応と政治主義的曲解と拡散のなかでの反応の純さ、即ち勤労学生としての存立意識の純さを紙面化してきた。今号は以上をふまえ、われわれ勤労学生のおかれている状況をみてみた。

二部の天六学舎から千里山学舎への移転の動向は、大学当局のもとにより、勤労学生の場を制度的に勤労学生のしめつけと、生活と権利の浸犯をなしくずし的に行ない二部を大きく変貌させているといった情況下、当局のもとにはこばれており、死活にかかわる深刻な現実性を帯びている。

二部の千里山移転の動向は表面的には、当局が昨年産学協同路線に位置付けた社会学部を飽和状態の天六学舎に設置したことによって、二部の千里山移転へ政治的に布石をしいたことによる。さらに来年度の社会学部募集人員を一五〇名と不当にも大幅に募集人員を増加させるといった行為をとってはばからない。

こうしたもとに当局は、二部の千里山移転について校友会との懇談会の席上で次のように語った。

「一日も早く二部を千里山に移転したい。かって岩崎先生が、二部が千里山では事情などの関係で勉学の時間が足りない。それを一部と同等の実力をつけるには五年制にしなければならないので、とりあえず二部を天六に移した。あとで根本的対策を講じようといいながら十四年たった。教学面でも不便で先生方は二部の千里山移転を切実に願っている」と。

このように大学当局の主張は、「教育の充実」をもって二部の千里山移転を合理化する当局の強弁な姿がそこにみられるわけである。大学当局による二部の改造への急速な進行を表明している。

関大会館にみられるごとく大学当局による勤労学生にとって全く無縁な設備投資、それに伴う経営の膨張、経営の危機、学生への転嫁、非個性的に大量生産に「国家社会の要請に応える教育」に集約する当局の合理化政策の一環として勤労学生の生活と権利の侵犯と犠牲をしいり、さらに当局のもとに決定的に二部の改造を運んでいる。

このような状況下において勤労学生の生活は破壊されている。

学費に関しては、三六・三八、三九年の学費値上げによって、三五年当時に比して約一二〇%の増加を示し、高度経済成長政策の中で諸物価は三五年基準指数として年率六%、教科書、参考書は二〇〜四〇%の上昇をみせており、二部勤労学生の生活的危機は増大の一方をたどり十分な学園生活を営むことはすでに精神的にも限界を示している。学園生活から一人ひとりと離れていく者が増えている。

力の弱い大衆労働者の生活を守る知識の場としての何ものの権力であってもそれ故非妥協的に闘うという精神の根拠地が、この良心が、大学の指導者によって空洞化され、形骸化され続け、次第に勤労学生は学園からしめだされている。

かかる二部の実質的な変貌を、「社会的動向」のもとに責任を転嫁し、更に政府・支配者層の意図する産学協同政策の具体化としての文教政策への呼応を「国家社会の要請」と階級的性格をもって、教育の「公共性」をもって「教育の向上」と合理化し、思想的・イデオロギー攻勢と強力な学生の自活治動の崩壊のもとで、分散的学生大衆状況下のジリ貧的な危機の状況に直面している。

戦後復興再編をなしとげた日本資本主義が政府、日経連に表われている「国家・社会に役立つ人間づくり」として「人的能力開発」政策として打ち出されたものを「教育・学問の中立性」といったフィルターを通して具体化している。教育免許法、大学設置基準の改正省令化などにより示される政府・支配者層の方針を個々の大学での機構の改編、カリキュラム改訂として実現し「期待される人間像」に表現されたところの〝人づくり〟の思想的・イデオロギー的内容をもって、学士を大量に造りだしていく企業と変容している。

「教育の公共性」と企業の拡大を「私学」のもとに学生に経費を転嫁した。三六・三八・三九年とうち続いた学費値上げ、さらに一部入試期日の変更と制度的に勤労学生をしめだし、二部を一部の落ち穂拾い化＝救済機関化と当局により大きく変容している。社会学部の新設という一連の学園の産学協同路線の顕在化である。

これらの動向により拍車をかけ二部の千里山移転の動向に、怒をもっていくべき学生の主体性の欠如—それは現在の大学、社会が持つ倫理そのものに圧殺され身動きがとれなくなっている無力な個々の学生の主体的な問題を大学当局は見過して、積年の〝二部〟の整理の攻勢と打ち出されているのである。

しかし勤労学生は学園を放棄することはできない。我々はやはり学園に残り学園とわれわれのより大きな発展を期すための努力はためされなければならない。この苦しい厳しい危機的勤労学生の生活を乗り越えて克服して行くしか関大二部とわれわれ勤労学生の存在を自からの手で拒否圧殺する悲劇的行為となるしかない。

論説

ナショナリズムの様相

現況の検証、対自へ

（一）

ナショナル・インタレスト（国家利益）がマスコミを中心に鼓舞されている。これは世界的な市場闘争の激化の中で西独、英国の先進国に匹敵する生産力を背景に日本資本主義は現在の商品市場における独自のブロックと援助、資本輸出による経済領域の確保②ケネディラウンドにみられる資本自由化をひかえての産業、資本の再編③ベトナム＝アジア＝米をめぐる軍事けい務と国防体制に直面していることの反映である。

合理化＝生産向上支持、階級的利益に対する国民経済、国家利益の優先を主張することであり、一方では国家支配の基礎として「秩序」と資本と労働の対抗関係を国家利益—経済政策の次元のもとで収拾するという現実主義、福祉国家としてあらわれ、国家の「公共性」「中立性」の幻想の強調のもとに資本主義国家に不可欠な暴力措置＝警察力、国防の強化を「国家利益」—民族主義のもとに集約し、革新勢力もこのナショナリズムと同次元に不幸にも立っている。

このことは諸資本主義国が独自の利害の追究として世界市場再編へブロックの再編＝共同市場をめぐって抗争する段階にあり、例へばEECへの資本輸出する圧倒的米国資本主義と仏の間は単に経済的ばかりではなく大きな政治問題更に国防問題として「国富」として民族、国家利益追究を強調するドゴーリズムとしてあらわれている。

これが第二次世界大戦以降、資本主義経済復興から民族独立と表現され、民族主義の大きな流れが世界を席倦している。

（二）

民族国家（＝民族市場）の確立と近代市民社会の確立とが軌一にして、そこに近代市民社会の二つの分裂として賃労働↔資本という「階級対立」が顕在化している。そして「階級」国家と人類と個人と労働者階級と対立することが現代の中心的問題となったが、これは社会主義的民族国家、後進国的民族国家、資本主義的民族国家との粋で何らかの解決をあたえはしなかった。人類を社会主義社会の生産力が資本主義社会の生産力より幸福にするとの平和共存のもと民族を基軸に主張したが、現代の中心的問題は追究しえなかった。一方ドゴーリズムのごとく先進国間ブロックを組みつつ米帝に対抗することのできない後進国的民族国家は当面米帝と相対的劣位な同盟を組みつつブロックの追求—民族国家の独自の利益の確保をめざし、「階級」国家を国家利益の民族主義のもとにヴェールしている。

しかし局地戦争に対する闘いと国内経済建設の闘いが併行的に行なわれている米帝社会内部の不平等＝階級対立として咆哮の自己表現は「長い暑い夏」の〝黒い力〟により米国産業の根幹のデトロイトそして通信基地ニューアークなどをはじめとしたゲリラ戦として、民族—国家利益の幻想をつきやぶり「階級」国家の姿を露わに現出せしめた。〝黒い力〟が民族主義的色彩を持ちながら資本—国家のナショナリズムに吸収されつくせない膨大な不満を日に再生産せざるを得ないという現象である。

（三）

「経済的な自由競争にもとづいた私有財産制」「市民の政治的自由」「議会制民主主義」これらは資本制の「階級」国家にとって基本形態にもかかわらず、階級的に「民主主義」の名のもとに民族的に全人民に虚偽され、民族国家利益として強調されている。

しかし資本主義の発展にとって、生産関係の最も大きな外枠である民族国家（国民経済）が生産力と矛盾し、国家をこえた活動を展開し、民族的国家的統一性が崩壊しはじめているにもかかわらず共同市場における独自の利益追究として国家、民族を焦点として労働者の階級性を奪い、生活防衛を切り捨てることにより、資本制の統治能力の強化である。

一見表面的には歴史を逆行するようではあるが、国家独占機構そのものが対するイデオロギー攻勢であり、革新勢力も民族利益追究のもとに腐俗され「階級」国家の暴力措置を「公共性」と錯覚する党もあらわれるといった危機的情況下である。

（四）

われわれ勤労学生にとって現在われわれのおかれている日々経済的ジリ貧の危機と、社会の倫理、規制のもとでの、身動きのできない危機的情況をハダで感じとっていることを解明にするべきであろう。

「戦後民主主義」の理念を、原体験からの論理化の運動がとりえず容易にドグマ化していているにすぎないか。

階級的視点とエネルギーの喪失をいかに再生し、そしてみずから現代の核心にせまり、そこから思想を創出し、運動を展開していく、その総和が一般的な思想や運動として歴史を動かすということを確認すべきであろう。

二部の千里山移転を表明

総長制度問題でる

当局、校友会懇談会席上で

七月一日、校友会と大学当局の懇談会の席上、大学当局は入学試験制度、総長制度、天六学舎問題（これは上述に記載）についての態度を表明した。入試については運動部の推薦制度問題であり、これは商学部不正入学を契機として顕在化したことによるが、問題は解決は緩慢である。さらに総長制度は学内で一致すればよいと産業協同路線の学内制度の確立を表明した。二部の千里山移転については上述。

入学試験について。学力順位に合格させるのもよいが、それが必ずしも優秀な学生とは限らない。私学には私学としての在り方があり、校友の子弟とか、教職員の子弟で母校に入りたい場合は考えてもらえないか。他の大学で行なっているのになぜやれないのか。また最近の運動部の弱体の原因はOBたちが両親や本人たちをくどいてスカウトしても成績で落されるからだ。私学であるから何らかの配慮が欲しいという話しをよく聞く。大学の考えを校友会として聞いて欲しいということだ。

大学は過渡期というか、立場が難しい。校友の中で話される方々の時代と、現在の関西大学は非常に異なっている。厳正公平な入学試験によって学生が大学に入ることは社会的にも注目されている。世間の注目は高校にあり、高校側での評価が大学の評価となる。今では、東京の私大に比べ入試競争率は本学の方がむしろ高い。評価を高めていく段階にある。学内でも、せめて教授の子息はどうかなどの話しもあるが、それをやることも困難だ。ある程度考えるといっても、それには限界がない。

—高校では大体在学中の成績によって受験校を決めている。母校の社会的レベルを下げないようにするには、今のやり方で止むを得ないとも思うが、入学試験の要項に特別選考制度のあることをはっきりさすことも考えられる。大学の信用を落とさずに、しかも校友の希望に叶う制度と方法を検討されてはどうか。

漠然とした私見だが、規模の小さい大学はある程度やれるが、マンモス大学ではとてもそうはゆかない。

—運動部の推薦制度については、おそらく来年ぐらい全面的に廃止されるような意向が強いと聞いているが…。

知育、体育、徳育というのが今日の教育だが、体育を通じての教育をどうもって行くか、その対策を考えるべきで、単に廃止すればよいというものではない。今までの体育に関する推薦入学の考え方は大学のPRということであった。それが時代的に意義があるのかないのかということになる。意義がないとするなら、それで学校の名を売り出すということは時代遅れだ。それならこれを止めたら一般学生の体育をどうもっていくか。その対策も噛み合わせるべきで、これを放っておく訳にはいかない。クラブ活動内部でも問題になっており、どの部でも一名ずつというが何とかならないか。またOBの推薦されるのもいろいろと因縁があり、姿勢を正さないと噛み合ってこないだろう。エリートの体育を延ばす大学もあるし、国民一般の体育という形もある。そういう面からも検討する必要があると思う。

総長問題

—これも校友の会合でよくでる話しだが、大きな大学では総長と称しているのになぜ関西大学は総長制をとらないかということ。おそらく評議員の内部でもなおくすぶりというか総長制が潜在的なものとして残っている。

学長を総長と呼称するのも結構だ。この考え方は変っていないが学則に総長を入れることはできない。寄付行為で学長を総長と呼称するのはご随意だということで、学内で一致するなら構わないだろう。この問題は社会学部ができたことにより、評議員会の総務委員会で相談して取り上げてみたらどうか。

ブルー・カラー時代へ

—42年就職状況—

本年度就職戦線の特徴は例年にくらべて求人および採用が早くなっている。例年は九、十月に求人が申し込まれるが今年は七、八月に申し込まれており、一、二ヵ月早くなっている。これは景気が上向いてきたことも原因の一つに数えられるが、中卒および高卒の生徒が進学する率が高くなってきたため就職者が減少する傾向にあり、従来中卒、高卒を採用していた企業が大卒を採用せざるをえなくなってきたことによる。ブルーカラー時代への突入といえる。いずれにしてもかんばしくなかった昨年に較べていくらか明るい見通しといえよう。

二部の就職状況は昨年とほぼ同時である。八月中旬現在では三十名近く決定している。二部学生の就職で問題になるのは転職の問題である。

現在に不満はあるが、転職するとなると、初任給から始めなければならず、またほとんどが中小企業であることなどが転職の大きなさまたげとなっているようである。しかし就職課では次のような指摘をしている。昨年せっかく就職が決定しながら卒業できなかった学生もあり、しっかり勉強して卒業することが第一であると。

学部		卒業者数	就職希望者数	決定者数	就職率（%）	巨大企業	大企業	中企業	小企業	官公庁その他企業以外
二部	法	347	18	4	22.2	1	3	—	—	—
	経	260	26	4	15.4	1	2	1	—	—
	文	167	13	1	7.7	—	1	—	—	—
	商	163	18	3	16.7	1	1	1	—	—
	計	937	75	12	16.0	3	7	2	—	—
一部	法	780	556	161	29.0	59	72	25	2	3
	経	690	542	164	30.3	66	70	25	2	1
	文	607	334	42	12.6	14	19	9	—	—
	商	643	459	136	29.6	54	57	23	2	—
	工	627	627	146	23.3	33	65	34	10	4
	計	3,347	2,518	649	25.8	226	283	116	16	8

経済学部に数学

入試概要を発表

大学は昭和四十三年度の学部入学試験の概要を発表した。それによると、ほぼ前年通りであるが、特に変った点は、経済学部の試験科目に新たに数学（数I・IIB）が加わったことが注目される。募集要項は十月末に発行される予定。

◇募集学部・人員（　）内は学科

【二部】法学部（法律・政治）約三〇〇▽経済学部（経済）約三〇〇▽文学部（英・国・哲・仏・独・史・中・教）約一五〇▽商学部（商）約一五〇▽社会学部　約一五〇

【一部】法学部（法律・政治）約五〇〇▽経済学部（経済）約五〇〇▽文学部（英・国・哲・仏・独・史・中・教）約四〇〇▽商学部（商）約五〇〇▽社会学部（社会・マスコミ・産業社会）約四〇〇▽工学部（機・機二・電気・電子・化・応化・金・管・土・建）約一〇〇〇（各科約一〇〇）

【二部】二月十九日〜二月二十九日（郵送の場合期間内必着のこと）

◇試験期日

【二部】三月三日（日）法・経・文・商・社の各学部

【一部】二月三日（土）法学部▽二月四日（日）経済学部▽二月五日（月）文学部▽二月六日（火）商学部▽二月七日（水）社会学部▽二月八日（木）工学部▽二月四日（日）各学部地方試験

米帝の犯罪性を立証

日本法廷—戦犯調査日本委

ベトナムにおける戦争犯罪調査日本委員会（英国のバートランド・ラッセル卿の提唱で生まれた独自の組織、代表委員海野晋吉氏ら）による日本法廷が八月二八—三十日の三日間にわたって開かれる。法廷では、調査団が約一ヵ月北ベトナムに滞在してハノイから十七度線の非武装地帯まで北爆下の模様を調査を証人とし、①国際法規にそって米帝の行動を審議し、犯罪性を立証②アジア諸国のベトナム戦争の加担を立証する。ラッセル法廷とともに、米国のベトナムにおける犯罪性をブルジョア法、革命的立場からも現在立証しえていない状況では意義があると評価されている。

なお、ラッセル国際戦犯法廷は十月再度開催される。議題として①武器②捕虜待遇③強制収容所について、スカンジナビアで開催する予定である。

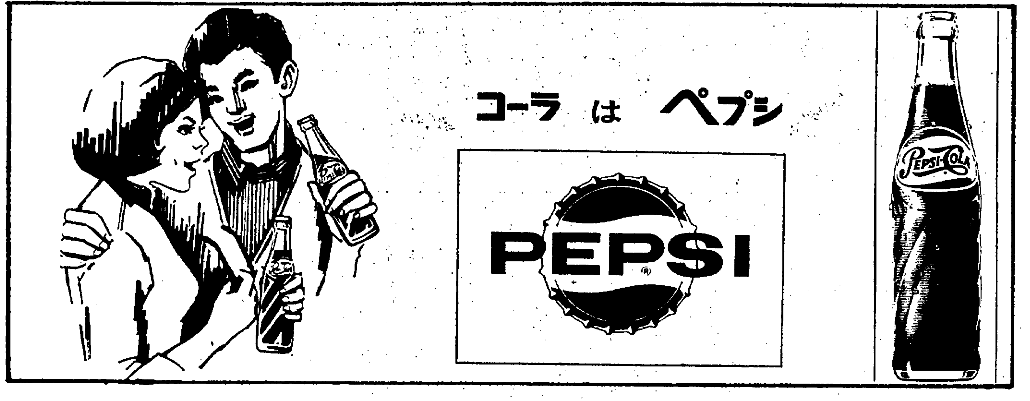
学声春秋

●マイホーム主義小市民主義なる非個性的な〝もの〟を大量生産するのを責務とする関大の教授陣「ものわかりのいい」教授とか、「現在は民主主義の逆コース」という民主主義ボケの教授とかが「民主的」教授らしい。大学の使命、変革のエネルギーの創造などは、「秩序」を破壊するものとヒステリックに叫んで「教授」にあぐらをかく自己の腐敗した姿に気付かず、怠惰をむさぼる。一部で生協部事件が起きたとき、学長をはじめとして教授陣同士で責任の放棄、なすりつけを平気で行ない、理事長が〝ひきしめ〟の演説を学長の前で行なうということに何も「民主主義」的にも反応もしない教授陣。大学人による大学を拒否する教授。こんなところから関大も一流だから総長制をとってはといったみせかけにみせた産学協同路線の確立計画がある●非妥協的反権力思想は大学指導者達によって空洞化されっぱなし。大学は経理学校等より人数の変動は少なく、施設費とか入学金とか、ただおしべりの建物をつくり変革の場を拒否し、貧困なもとに学生をおしこめ、学生からの全面的収奪の上になりたっている。これを当然とする教授もおり教授失格宣言を出す勇ある教授もなく「生活を破壊する」とアマッタレた。そんな大学やめたらよいではないか。そんな勇もないのじゃ同犯か？、この社会を拒否するには「やめる」—逃避する—か反抗するか、反抗しながら変革へのエネルギーを創造、探究する道しかない。ところがなにもしない感知しないものが大量生産される。「階級」国家のなせる巨大な実績●ところで米帝社会での徴兵拒否の手引から興味あるものを紹介する。マクナマラ国防長官と同性愛関係をむすぶ。ホワイト・ハウスの正面を素裸で行進する。マリワナ合法化運動の委員長となる。CBSテレビを通じて全国に徴兵カードを燃す場面を流す。からだを赤、白、青に三色旗よろしく染めあげて委員会に出頭するなどその他。アメリカ的徴兵拒否のお奨め「階級」国家へするどくマカロニウエスタンよろしく対決してほしいですね。ところで日本で、民族国家への革命が米帝を中心する世界資本主義各国の反革命による戦争に対してブルジョアージーも革新政党も仮想平和の「防衛」を訴えている。●「階級」国家のなせる巨大な実績。驚愕。ニヒリストになる己れに驚愕し、ひるがえって強い男になりたい。それにはこの関西大学は毛沢東流反面教師といえるのではないだろうか。毛沢東先生は資本には弱いが、遊撃戦の天才ではないだろうか。さて「階級」国家での遊撃戦を、このエネルギーを己に転嫁しえるか。

（流弾子）

学生証持参の方には割引！

貴金属・時計とメガネの店
関大正門通
市川時計店



新発売
TANCHO MYCOMB SPECIAL
丹頂が化粧品

オトコがえらぶ！　オトコが決める！　ナイスタイプ整髪料
丹頂マイコーム〈スペシャル〉
●ミクロ乳化整髪料
●100g 300円　●60g 200円
❶ベタテカしないでバラつかない
❷ドライヤー効果をフル発揮
❸ハンディなポリ・チューブ入り
❹毛の質に関係なし
❺洗髪は1回で完了
❻男らしい香り
丹頂株式会社

アメリカの青春
My College Life in America
岡地勝二著

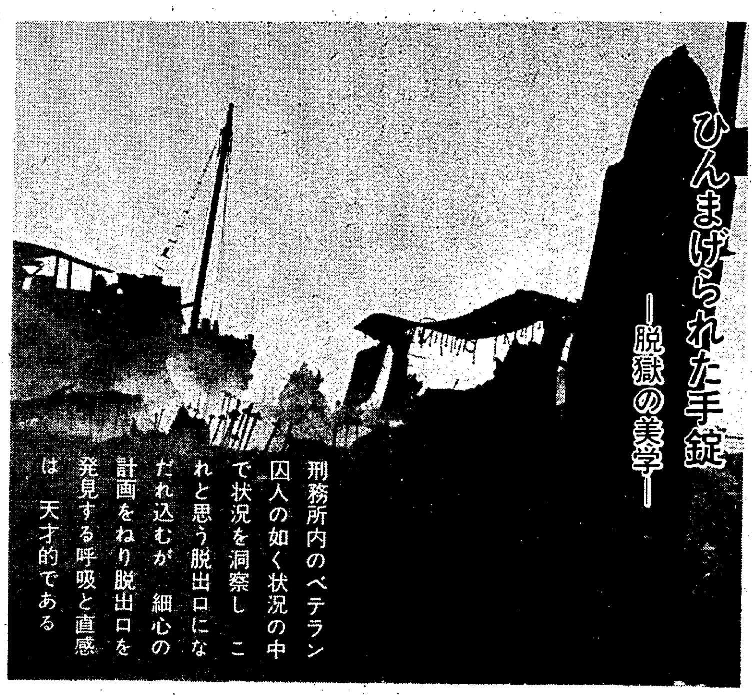
好評発売中！
定価　三六〇円

アメリカ留学生の体験記

アメリカ・ロータリークラブの将学資金でジョージア大学に留学した著者は、アメリカの大学生活を通じて生々しい青年男女の生き方、考え方、そして恋愛などを、じかに肌で接してきた。ドキュメンタルな六十数枚の写真をそえて語るこの書は、そのまま現代アメリカ青年像の実態をえぐる問題作である。

ユーモアで綴った文章と随所に見られる鋭い批判の精神は、著者が素朴な青年であるだけに、既成のジャーナリスト、評論家というような人々の目を通してのそれとは異なった新鮮味と感銘を読者に与えるであろう。これから留学を志す青年にとっては何よりの参考書であり、また広く一般の人々にも一読を奨めたい好著である。（森川学長）

大阪市浪速区西賀町二の三
（常盤ビル）
株式会社　京文社
電話（六四一）八三二七番



ひんまげられた手錠

—脱獄の美学—

刑務所内のベテラン囚人の如く状況の中で状況を洞察し　これと思う脱出口になだれ込むが　細心の計画をねり脱出口を発見する呼吸と直感は　天才的である

川桐信彦

現在とは閉鎖的情況であり根源的なものの喪失から変革のエネルギーの創造へ〝脱獄〟の試行を川桐信彦氏に今回から四回にわたっての予定で探究していただく。

(1) 美的実存と超現実性

この稿を始めるにあたって、私は『切られの美学』というイメージが生じた。自己の生身を切るという動作を予想することによって起きる一種のマゾヒックな快感、あるいは自己の分身に等しい愛する女の白い肉が切られる時の、戦慄すべき衝撃と快感が、観念的にあらゆる「出口なし」の閉鎖された精神の不自由感を少しでも和らげる効果が想像できるからである。

しかし、そのようなマゾヒックな快感などで、私の意図する積極的な「脱獄」の行動を換起する美学が、全的に表示されることはないと考え直した。今後の美学は積極的行動と切り離せないからだ。

ジュールス・ダッシンの『白昼の脱獄』という映画を見た時、私は、すさまじい脱獄というアクションの中に、見事な美をみてとった。それは、内的世界の爆発にも類似したカタルシスであった。それと、スタンレー・カブリックの演出した『現金に体を張れ』を見た時、私は、内部からの脱獄ではなく、外部からの脱獄ということを感知したのである。競馬場の売上金をうばい取るという行動は、レース中の馬を射殺したり、うばい取った金をどう持ち運ぶかという煩悩的な快感に支えられて自己を一つの状況の中に飛びこませることによって、さらに能動的な脱獄を遂行する美を生じるのである。

一九六四年五月九日に、私は次のような宣言を発した。大統領が愚劣なメッセージを発表し、あらゆる集団がまことしやかに頽廃な宣言を実施する時、当然私は自らの宣言を企図した。

詩人として、演技者として、文学者として、余は驚倒すべき企図において全てを表現する行動的人間であり、同時に悲痛なるピエロである。

これは単に、ほんの書き出しに過ぎない。宣言の全内容は、私の全生涯を通じての行為と表現によってのみ伝達される。

自信家の傲岸さと、不快な場に自らを投獄させた五年間の歳月、及び早熟ということは真の詩人が純正な思考と鋭敏な感受性を破壊されるような場に耐え得ないことの説明である。非芸術的人間は、宣言する主体性を嘲笑する。しかし、芸術家の存在は強烈なナルシシズムによって支えられる。生れるという不条理を背負って以来、真の詩人にとって、そのあらゆる状況は監獄的要素に満ち、あらゆる外からの言葉は、監守の暴言でしかない。脱獄の思想も、投げ出された世界の「監獄的性格」によって触発される。しかも、感受性を破壊されるような場に耐え得ないという宿命をになった彼は、何によって救済され、何によってすさまじい復讐を遂行するか。それこそ、脱獄の美学という根拠によってしか可能性がないのだ。しかも、それは確実な救済などを予期はしない。

脱獄という表現をとるのは、日本的思惟性と文化性が、私もまた日本人であるという宿命を否定出来ないために、強い心情のひっかかりとなるためである。石原慎太郎は、雑誌「20世紀」8月号において、最近の黒沢が阿呆らしいチャンバラか老人性涙線炎のようなセンチメンタルなヒューマニズム映画ばかりで一向にくだらないと述べている。そしてアルメンテロスとかいうボクサーのフックの切れ味や丹下左膳の刀の凄さが、脱のある力に満ちた男のナルシスの例に引き出される。極めて大学のスポーツ選手的感覚の持主が日本の若手代表作家だという、まるで自分の妻君が悩梅毒であることを公表するような気恥づかしさ。黒沢の映画職人としての腕は「赤ひげ」や「椿三十郎」でさらに充実している。

グランプリをとったからといって映画職人に哲学者か詩人のような姿勢を要求する小児的飢餓性を露呈している石原の思惟性。いいかげんにしろである。最近の小林秀雄の出版物もつまらない。著名な評論家を踏台にして、批評ジャーナリズム界に躍り出る小ざかしい青年もいるが、小林秀雄など専門的職業的文士が、より多く詩や絵画の世界に時間をさき、その世界への手がかりを与えはするが衝撃を与えはしないという例証でしかない。『憂国』の三島由紀夫のまるでアマチュアくさい大根ぶりと演出家としての小児性を露呈した事実に対するジャーナリズムの反応もまた嘔吐的現象である。私はジャーナリズムの総攻撃を期待していたのだ。

岡本太郎程度の画家の発言におさえられる日本画壇、佐藤栄作ごとき人間しか総理大臣であり得ない日本。これが俺の国の総理大臣と、どうして自信をもって公言できようか。とすれば、日本的産物すべては、否定的なものであるか。それのみが心情のひっかかりであるのか。いや、私にとってはドストエフスキーでさえ、それほどまでに、はたして偉いかという疑問にさいなまれている。

ドストエフスキーの「罪と罰」における苦悩は、老婆を殺害することを秀才の意識において正当化しようとする、キリスト教倫理にまつわる人間についての、実在的挑戦かもしれない。だが、神への反乱という対立を概念をぬきにして、虚無と限界状況の中でさまざまの日常性を脱して巨人創造を自己に課した大戦後の青年のすさまじいまでに奥深い生についての吟味、大衆というマスによって与えられる人間についての貴重なイデーに対する脅迫、更に、老婆という手あかのついた人間の実在をよび戻す余裕も与えない、あのラッシュ・アワー的人間の群衆は、白昼の刑務所内で大量に生きたままの死の状態にあることを目撃する苦痛を当時私に焼きつけるのだ。

劇団「雲」の「罪と罰」という甚だドラマティックに脚色された舞台をみたあと、あのラスコリニコフが、良心というものによって罪の意識がわき出ることは、要するに自分が天才でも偉人でもないことを証明するのだという内容の意識にとりつかれていたことを考えた。罪の意識はドストエフスキーの場合、甚だキリスト教的感覚によってのそれだと思うが、「罪と罰」においては殺人という行為が現象的には罪の前面に押し出されている。

倫理的・キリスト教的にはラスコリニコフの罪に対する苦悩は、極めて人間的であり、精神の深さを提示しているようには見える。だが、ラスコリニコフ程度の思想「天才には有害な存在は抹殺できる」とか「ナポレオン的偉大さに到達するための小市民の立場で可能な行動」など、日本の一寸できの良い高校生ならさらに考えそうな内容であり発想ではないか。

筆者は、高校一年の時「罪と罰」を読み、判事とラスコリニコフの心理的なやりとりに小説的興奮を体験したが、不思議にもラスコリニコフに自分自身の心理的恥部をさらけ出されたような感情を憶え、ドストエフスキーに共感はしたが、ことさらに偉大な作家だとは思えなかった。つきあげる思想と苦悩の感受性は、あまりにも高校生的カテゴリーを出ないのだ。私は十数年にわたって、文学や演劇についての迷妄に挑戦する決意を続けたが、生きることと考えることに終始し、文章そのものを商業的に公開したこともなく、演劇についても、サルトルの劇作を四、五回公演したのみであった。偉大であるとされている存在の大半は誰かが評価したものを継承しているにすぎない場合が多い。

主体的な対決による自己の評価であるより、継承的産物をうけうりして無能なくせに批評家ぶった存在がシラミのようにたかり、奇生虫のなすにまかせたマス・コミ文化圏の俗物性、植物性、凡俗性の鉄格子の中で、爆発的いかりを生じない連中の神経の方がおかしいのだ。芸術的にも思惟的にも無味乾燥な獄中にわれわれはいる。文芸時評で山本健吉が熊田真記や大田治子をけなして大人げなさを示し、尾崎一雄や永井龍男のようなヘドの出そうな文章家を「安心して読める」などといっている現状ではないか。外国の作家といえばミラーでもジュネでもカポーテでも食いつきながら、あの程度の発想や世界性を持つ存在に対してよそよそしい日本的知識階級という存在のいやらしいみみっちさは迷妄どころではない。

コクトオ、バルザック、ダリ、ボッシュなどの生理感を食いつくし、さらに豊満で強大な芸術の体質を保持するためには、この偏狭劣悪な迷妄にみちた看守を射殺しつるべ打ちの痛罵をあびせ、さらに強大な怪異性をもって刑務所の出入を自在とし、ワイ曲された卑少な神を追放して無限的に壮大な神の死を復活させなければならない。それはベートベンの数十倍の規模をもつシンフォニーであり、内的デリカシーの独奏でもある。

創造的な魂や強力な意志という根源的なものが傷だらけになって監獄内に呻吟する時、刑務所の大学院生たちは、底知れぬ演技と企画性をひっさげ、虚無と反意志的生からの脱走を遂行し、ニーチェを越える傲岸不遜にして尨大な観念の所産を鉄の扉を粉砕するダイナマイトとすべきだ。芸術的美学的脱獄者には、獄もまた必要なのだ。

芸術家は、いわゆる大学における綜合教育のような「教育」を必要としない。自己にとって高級な血肉を独自に食いつくすからだ。無論、地上の大学によっては、幾分芸術についての勝れた供給を可能とするところもあるには違いないが、天才は、個有の世界で個有の感受性と創造力を発揮する。綜合性は常人の及びもつかぬ広大さで自らこれを獲得している刑務所内のベテラン囚人の如く、状況の中で状況を洞察し、これと思う脱出口になだれ込むが、細心の計画をねり脱出口を発見する呼吸と直感は天才的である。法律家より法律の性格を、政治家より政治性を哲学者より哲学的実体を、鮮明なイメージと思索のひらめきによって獲得し描出する。

脱獄行為による反逆と再脱獄の余裕の工房へ

オーソン・ウエルズの「審判」は、カフカをウエルズ的に映画化したが、一つの個性と、ウエルズ流の映画美学を示し、しかも部分的には、ウエルズ流に失敗した。だが天才は失敗を恐れてはならない。失敗を通して、猛烈な脱獄のまき返しを試みることにより、その美的執念を固守すべきだ。致命的失敗は無能を示し、更に死こそは全てを完結するのだ。

キルケゴールなどによって、一層自覚的に人間の「深淵」が凝視され、アンドレ・ブルトンの「シュール・リアリズム宣言」に触発され一層「現実」への抵抗の姿勢が芸術家の心情を形勢しつつあるが、「積極的脱獄」こそ永遠的な芸術の味覚を要失させないエネルギーなのだ。シケイロスやマチスと共に、色彩と溢れるような創造の意欲に満ちたルフィーノ・タマヨの個展で、エネルギッシュな発想の奔流の中に私の目にとまったのは、「昨日のイスラエル」と「今日のイスラエル」という絵であった。「昨日のイスラエル」には、輝んばかりの丘、黄金の大陽と自然が描かれ新約的生命感の充実があった。

神話的表象の持つ、深い生命力と、光と充実した空間は、卓越した宗教言葉のように楽想を奏していた。一方「今日のイスラエル」には、ジェット機のような物体が上部に描かれ、それは力があるように見えてブザマであり、区画整然として地表はかすれた色彩に変じていた。今日とは 生命力と根源的なものの喪失の時代である。非情のからくりの中で、民衆は生活に疲労を憶え、針がねの神経を思わせる乱雑な行為と暴音にかき回された心情からひねり出される「故意」の創造性は、自らの振りまわす剣で自らを切りさいなむような状況を生じている。

アントニオーニの私小説的な匂いのする文学的密度をもった映画作品も、ワイダ流の映画の詩にもとくに「祭」についての人間の悲哀が提示される。黄金の丘と生命力の満ちた世界を夢みる囚人たちの脱獄計画は、極度に現代的ロマンチシズムの現れである。ゴーギャンやジッドの西欧文明からの脱獄の姿勢は「シベールの日曜日」のように「この現代の現実社会から隔絶した世界」のドラマに埋没する姿勢に変形され、しかもわれわれは、われわれの与えられた世界に生きなければならぬことを逆に強調する。与えられた世界を生きるには、再突入による撹乱と綴密な行動および再脱獄についてのプランが必要なのだ。

マルセル・カルネは「天井桟敷の人びと」によって戦争に抗したが、芸術の本質は、むしろ「隔絶した世界」を固守しているように見えて、実はそこにこそ人間にとっての極めてリアルな真実が秘められ、根源的な人間のリズムが示されるのだ。だが現在の時点では積極的脱獄の中に、人間の真実性がさらに強烈な美をともなって示され、苦悩の叫びが沈黙の世界にひびき渡る。ないものを存在させる世界に異常な執念をたぎらせる。

われわれは耐えて生きなければならぬ部分が多すぎる。ピアノを弾く美少女と心中してしまいたい誘惑、ギターの名曲を聞くとき、永遠にこの時間のみが継続してもらいたいと欲する誘惑にかられる。

「耐える」に価する生への渇きをブリューゲルやロダンの指先のようにまさぐりながら、鋭く凝視することは、完璧な脱獄の美にとって必要なのだ。不条理を背負った悲劇が転じて「生」の充実へ転嫁させる能動的脱獄、あり得ないかもしれぬことへ突入するロマンチシズムに満ちたアクションこそ、私のいう美学なのだ。耐えることに終らず強烈な反逆の脱獄性にめくるめく美を快感することだ。

今日の文化現象を、いわゆる芸術的養分と内的精神史の必然性を基盤にして凝視すると、文学、映画、演劇の迷妄さや、語られるさまざまの人生教訓的説話に対していいかげんにしろと叫びたくなる。

一般には気づかれない微細な光点であっても、それを重大なものとして察知するインサイトや感受性の欠除は甚だしいものである。その理由を問われると、複雑怪奇な様々の要因を提出して行く必要があるが、現代人は、真の意味で「祈る」姿勢を喪失したが、あるいは止むなく中止したか、それとも疲れ果てて思惟の余裕を持たなくなったということは事実であろう。オズボーンやケラクックの初期の文学活動は、ビート・ゼネレーションという呼称によって宣伝されたが、この現象は一時的にでっち上げられた卑劣な生活感情の所産ではない。すくなくともそうではないと私は信じたい。

早熟で敏感な洞察と苦悩は、私が希求し、哲学し、文学し、絵画や音楽に探り求めた姿勢の内実の深みと切迫感が、既成宗教、権威、政治、社会への反抗的姿勢となって生じた形と一致するものであり、個々の主体性から隔絶された神殿の救済ではなく、今現に存在する一個の人間の魂の激しい希求性の吐露なのである。アメリカのギャング映画で、顔の長い目のふちの黒いティモシーという俳優が「俺は刑務所の大学院修了だ」とほざくというシーンがあったが、この希求性の終極の表情の美学を私はそこに発見した。あらゆる洞察の先覚者が誤解されることによって、その真理性はちりあくたのように闇に葬り去られた歴史の不条理は、現実の社会の悲劇的様相の一つかもしれない。

現体制の全てを維持継続させるに必要かつ適正な大学生の群れが迎えられ、一つの混沌の中に体制をおびやかす宿命をになった存在者の光は、キリストの十字架の如く常に処刑されるのだ。脱獄を策するベテラン囚人の目で見る時、様々の愚かしさが露呈される。喪失の根源的要因があばかれる。詩の或る側面は激越な感情の歌であり、文学作品はそれを定着させ客観性を与えようとするが、その客観性が人間を相互関係的に親密化させ同調させるプロセスの中に、おそるべき退廃の兆があるのだ。脱獄は前衛の如く、内部からより外部からの脱獄への挑戦と作戦と熟練を必要としつつある。内部も外部も監獄であるかもしれないのだ。

一個の人間は、ロッシーニ、プッチーニ、ワグナーといった、ロマン派の音楽にも接したであろうしビゼー、ショパン、チャイコフスキーから、バルトーク、シエンベルグを体験し、シェイクスピア流のドラマや、ドストエフスキー流の激情も体験し得る。さらに、第二次世界大戦、フランス映画のスノビズム、モダン・ジャズ、実存主義といった雑多な思潮と風俗に共感と反感を抱き続ける。さまざまの諸要素の中で、芸術家はそれらをどのように拒否し続けるのか。濫盛な食欲と貴族的拒否の姿勢が、極端なエネルギーを形成すると十九世紀的人間の脱獄意識より、さらに行動のスケールは倍加すべきなのだ。

キルケゴールやニーチエの思想は、彼らの詩人的資質もしくは詩人としての独創的インサイトが発露であり、その感性の表出力が旺溢しているのを感じとれるのは、彼らのロジイクよりもその発想の独自性に共感させられるからである。面白い人間と退屈陳腐な人間についての臭覚は猛烈に発達するのが脱獄者だ。「啓示」の最も啓示的なものを、私はシュールリアリズムの絵画と音楽によってしか受けていないのだが、諸種の教説がその目的とする所と異り、啓示的性格がほとんど感じられないのは、深い意味での啓示性の要失にある。同時にキリストやニーチエ流の古色蒼然たる脱獄者の詩感が現在の脱獄者においては鮮烈な都会性をおびた性格とに受けつがれる。

文学や物の芸術品からよみとれる内容を、実在的に自己の在り方に直結せしめようとするのは、一つの実在的必然であり、その方法は、現代の愚劣にまで繁雑化した社会では美学上の脱獄行為によってしか達成されない。啓示的脱獄者は惰眠をむさぼる衆愚の世界は感知しない。思想と生活内容が固く結びついて、それなしには一瞬も生きられない激しさこそ、脱獄者の重要な契機であり、この知的苦行者の激烈な抵抗は、脱獄という行為による反逆と再脱獄の余裕によって表現され、その余裕こそ人間と歴史に対するギリギリの愛着なのである。

（前衛詩人協会々員、作家）

原水禁運動

大衆組織として、日本を主体に世界を席捲した原水禁運動が、内的矛盾によって三年前分裂、固定化し、〝混迷する原水禁運動〟大会、拡散、まやかし、政治運動へのなしくずし化などのなかで、今年の問題と課題をルポした。

■混迷の固定化　大衆運動の〝姿〟は？

今年も「ヒロシマ」の季節はすぎていった。八月六日・九日にわれわれは、ただ黙悼をささげるしか「平和」への働きかけをためすことのできない焦操感を覚える。

核の勢力均衡というシーソー的世界「平和」は、一方での、国際帝国主義、特にアメリカ帝国主義による、世界階級闘争弾圧の手段としての軍事政策の頂点における核、そして他方、それに屈服した形でもっぱら自己の安定を図るための、とりひき手段として（その結果としての平和共存）核を用いるスターリニズム・ソ連という冷やかな現実である。加えて 米ソによる核独占ー大国間ボス交による勢力均衡ーを揺るがす中国の核実験は、世界で唯一の、われわれ日本人の原体験をゆすぶらずにいない。アメリカ帝国主義の、核軍事力による世界階級闘争弾圧は、ベトナムにおいてその具体的使用を最終戦術とするところへと、ますますエスカレートする。ベトナム人民の闘争になすすべを知らぬソ・中ではあるが、しかしそれでもその核は、ベトナムにおけるアメリカの核使用を抑制する力となっている。

ベトナムをめぐる危機感が支配する中、今年も「ヒロシマ」の季節はすぎていった。

さて、戦後数年を経て、杉並の主婦たちから始まった原水禁運動は、一九五五年に第一回原水爆禁止世界大会を広島で開き、やがて日本原水協を生んだ。以後、原水禁運動は、日共の党勢拡大という政治主義、中国の核実験の評価をめぐって、六三年社会党系の脱退国民会議設立という分裂があり、社共分裂の固定化は、運動の形骸化と沈滞を生み、今年に至ってその傾向はますます顕著となってきている。またそういった傾向のもとで、原水禁運動の統一を求める声が聞かれるようになった。一方、こういった〝政党化〟した原水禁運動を乗り越え、新たな大衆運動の高揚をめざす、青年、学生による反戦青年委員会の討議集会が、原爆の日、八月六日広島で開かれ硬直した現状の打破を試行している。

焦操感の推積

「ヒロシマ」の季節はすぎさっていった

核禁会議（これはもはや大衆運動でも、もちろん平和運動でもない）、原水禁国民会議（被爆二十二回年原水禁世界大会）、日本原水協（第十三回原水爆禁止世界大会）の順で開かれた今年の原水禁運動における大きな「事件」は、「原水禁」（社会党・総評系）への、ソ連の不参加があげられる。（「原水禁」ではこのほかイスラエル問題もある。主催者がいったんイスラエルに対して招請状を出しておきながら中東紛争をめぐる評価で、アラブ支持、イスラエル非難をうちだしたため、開会直前になって、イスラエルに対して招請をとり消し、おまけに大会でイスラエル非難をはじめるという不手際があった）。分裂以後、「原水禁」へだけ代表を送っていた（「原水協」からは参加拒否）ソ連が、今年になって「原水禁」へも参加しないという背景には、ソ連の一国社会主義を基軸とした世界政策の動き、中共からの離反と右傾斜する日本共産党への再度の接近と国際共産主義運動という動向がみられる。

分裂の直接的導火線となった中国核実験をめぐっての評価では、その頃、中共と密接なつながりをもっていた日共は、当然中国核実験支持をうち出し、「いかなる国の核実験にも反対する」社党、総評の脱退となったが、その後日共は中共とは疎遠となり、「自主独立」の言葉で示される路線をとるように至っている。中ソ論争抗争以後、ソ連寄り中共寄り「自主独立」と国際共産主義運動でよろめき路線を続ける日共とソ連共産党とが中共の革命運動をめぐり、自己体制の保持ー民族主義に裏付けされーのためここでふたたび接触をもつようになることは予想され ソ連の「原水禁」への不参加が、この布石であるとみられている。

その「原水協」の一部、共産党は、「日本人が始めて開いた原水禁会議」などという、極めて貧困な過去の総括によって彼らの原水禁運動における姿勢、即に日共の政治形態の一つとしてしか、これを把握していないという徹底した大衆蔑視性を、あらわにしたのも今年の特色といえる。

このような情況の中で、ソ連の動きを媒介として、原水禁運動の混迷と沈滞の克服を、運動の統一によって図ろうとする極めて大衆運動を放棄し、ソ連=平和国家の神話にすがるといった声が上るようになっている。（この声は主に下部からのもので、運動の幹部たちには無視されているようである。）この統一問題を考察する時原水禁運動の混迷と沈滞が、はたしてその分裂状態だけに起因しているのかどうかをみてみる必要があるだろう。質における弱さが、単に物量的な増加で補われうるのかという一点と、大衆運動としての原水禁運動のそもそもの性格がいかなるものであるのかという点が、明らかにされねばならない。

■《原体験との隔絶》

先に述べたように原水禁運動は第二次大戦後ーつまり被爆後ー数年を経て始まった。朝鮮戦争による一定の経済復興の中、核アレルギーと厭戦気分が「ビキニ」によって「ヒロシマ」「ナガサキ」をわすれかけ（いや意識的）ていた日本人の心から一斉に平和運動へと転化させていった。しかし「ビキニ」による「ヒロシマ」への転化があの戦争の悲劇後の平和を〝守る〟という形でなされたことに注目しなければならない。戦争の悲惨さへの反発が、原水禁運動を生んだという極めて市民的ヒューマニスティクな側面で処理され核がもつ階級性、つまりそれが資本体制の矛盾の頂点であり、その廃棄は階級社会そのものの止揚によってしかあり得ないという認識がなされなかったのであり、運動をその方向へと位置づけ得なかったという問題は、さらに運動内部における矛盾として蓄積していく。

「平和」とは闘いとるものであり創り出すー労働者自身によってーものであるという意識のないまま、ベトナム反戦を唱える一方で実体のない平和擁護をうち出さざるを得ないという矛盾をあらわにしている。原水禁運動が社共の政党化によって、運動におけるこの没階級性による内部矛盾が、中国核実験という導火線で、一挙に爆発するのであるが、あくまで火薬は運動内部に存在するのだ。

運動における矛盾は、例えば原水禁運動者が、日常においても運動者であるのかという問題と被爆者と運動者の相克という問題をもつに至る。被爆者における原体験は、ますます個々の人間の内部へと深化していき、故にその「不幸」と「苦悩」とが、積み重なり一つの運動の実体へと転化し現実的持力となるにはさらに外の力ー運動者の力ーと結びつかねばならない。

しかし、被爆者の「苦悩」が、唯一絶対なものであるのに対し、運動者におけるそれは、非日常的なものとして把握される。

運動者におけるこの非日常性が日常性と完全に同化されないーされようとする働きかけのないーままに、そして被爆者と運動者における隔絶が克服されないーされようとする働きかけのないーままに現在に至って、分裂、形骸、沈滞として現象しているといえよう。

■《平和》は闘いとるもの

このように運動自体のもつ矛盾ー弱さーが、運動をおし進める中で解決されない状態である限り、「統一」は不可能であり、たとえ統一がなされたとしても、それは第二・第三の分裂の前提でしかない。質における弱さは、単に物量的増加によっては補われない。核のもつ階級性と、その廃棄は核が階級社会の矛盾であるが故に、階級そのものの止揚にーもちろんそれは労働者の主体的な働きかけによってーよる外ないことを、認識した上で、「平和」を創り出す運動を展開しなければならない。

今、われわれは大衆のない運動状況の中にいる。ベトナム戦争における軍事的任務大なる砂川基地強行拡張にみられるように、佐藤政府のベトナム戦争加担は公然化してきている。さらに佐藤首相は今秋、訪ベト・訪米を決意しており、また、三次防・小選挙区制実施と続く動向は、明らかに、七十年安保への布石として準備されている。六五年、日韓条約阻止闘争の中で誕生した反戦青年委員会と六六年再建された全学連とが、今年の春から夏への砂川基地拡張阻止闘争の一定の高揚という成果のもとに、八月六日、広島で反戦集会（原水爆禁止全国青年学生反戦集会）をもったことは、こういった情勢のもとで、極めて大きい意義をもつだろう。

市交通料金大幅値上げす

東京都について大阪市会は市営交通事業の赤字解消を市民の負担によりはかる再建計画とこれに伴う市電、市バス、トロリーバス、地下鉄料金の一斉値上げ案を、賛成多数（自民、民社、社会は賛成、公明、共産は反対）で決定した。十月一日から市電、市バス、トロリーバスの路面三交通は現行五円から十円、地下鉄は十円アップされ、通学定期は市電25%、市バス21%、トロリーバス38%、地下鉄53%と大幅に値上げされた。京都市も値上げが予定されるなど革新市長が幻想であったことをしめした。それも交通局に働く労働者を配置転換首切りと整理し労働者を犠牲にして断行している。

大阪市の場合、社会党は革新市長の幻影にしがみつき、一方共産党は物価政策を持ちえず、東京都議会において都電撤去と労働者犠牲の交通部案を、警察の暴力を「公共性」のもとに「秩序の代弁者」に転じて通過させ、一方大阪市で反対との態度は、大阪における社会党との関係をめぐる抗争で「反対」といった党派的政治主義が強かった。

さらに当局は夏季は、学生の〝阻止〟の組織力が発揮できないといった配慮をもして行っていた。

勤労学生はこれでより一層生活的危機のあおりをくらい、よりジリ貧的状況へ傾斜していく。

関西大学生活協同組合天六支部

専門書・学用品・新刊書・衣料品をより一層充実！

中央公論社版『日本の詩歌』（9月予定）全30巻 各四八〇円
新潮社版『日本詩人全集』全34巻 各三〇〇円
思潮社版『現代詩文庫』（10月予定）全50巻 各三二〇円
中央公論社版『世界の名著』全66巻 各四八〇円
筑摩書房版『経済学全集』全28巻
バーバラ・ガーソン著 河出書房版『マクバード！』二九〇円
筑摩書房版『宮沢賢治全集』全12巻 各七六〇円
武田泰淳著 芳賀書店『揚子江のほとり』七九〇円
藤田省三著 みすず書房『維新の精神』三八〇円
P・ジェンティーレ著『イタリア現代史』六八〇円
H・ヌルクーゼ著『工業社会とマルクス主義』七五〇円
F・フロム著 紀井田屋書店『社会主義ヒューマニズム』（上・下）各四八〇円
埴谷雄高著 平凡社『影絵の世界』四五〇円
ポール・ニザン著 晶文社『アデン・アラビア』五八〇円
井上光晴著 勁草書房『眼の皮膚』四八〇円
恒文社版『現代東欧文学全集』全13巻 各五三〇円
谷川雁・吉本隆明他『民主主義の神話』三八〇円
梯明秀 現代思想社『資本論への私の歩み』四〇〇円
梅本克己 岩波新書『唯物史観と現代』（9月予定）

■ 法・経専門書
■ 全集
■ 岩波新書、新潮文庫
■ 新刊ベストセラー
■ 就職試験参考書
■ 語入学門・辞書
■ 教科書

文房具
体育実技用品
タイプライター
衣料・雑貨
ペプシコーラ